

「日韓の『和解』はどのように可能か」

日程：2008年11月7日（金）

場所：国土館大学梅ヶ丘校舎 204 教室

朴裕河（パク ユハ）

今日は、『ヨウコ物語』（So far from the bamboo grove）と朝鮮人特攻隊「慰霊碑」に対する反発という二つの事件を通して、その背景や問題点をお話しながら、どうしてそのようなことが起こったのか、そこから何が見えてくるのか、ということをお話したいと思います。

1．韓国における二つの事件について

『ヨウコ物語』はアメリカに住んでいる日本人女性による自伝的な小説です。韓国では2007年1月にこの物語は歴史を曲げているという抗議がおこり、アメリカで初等学校の推薦図書になっていたこの本を教材から排除してほしいなど様々な議論が起きました。そして2008年11月にはカリフォルニア州でその請願が受け入れられるにいたっています。物語には、戦後の引揚げ時期に北朝鮮に住んでいた日本人の母親と娘の三人家族が南のほうへ逃げてくる過程で経験した話が書かれているのですが、そのとき見聞きしたことのひとつとして朝鮮人男性による日本人女性の強姦の話がありました。そのことにたいしてアメリカの韓国人少女は歴史上の被害者は韓国なのに、日本人を被害者として描いているとして反発したのです。そしてそのことが知られた韓国でも、当初の好意的な受け止め方から打って変わって激しい非難が始まったのです。

そこで、たとえば北朝鮮に竹林はない、といったようなファクトに対する批判から、この物語はうその物語だということになり、著者が戦犯の娘だという疑惑までもたれるようになりました。出版社にも抗議が集中し、出版社自らの決定で出版も中止されました。

二つ目は、朝鮮人特攻隊のための慰霊碑を、ある日本人女優が韓国に作ろうとしたときに起こった反発です。彼女の夢に朝鮮人男性が現れて、自分は昔戦争で死んだけれども、死んだことに悔いはないが、日本人の名前で死ななければならなかったことが無念だ、と言ったということですが、彼女はいろいろ調べてその夢の人物を突き止め、遺族と交流を持ち始めました。そして長年準備して今年の春韓国の南地方に慰霊碑を建てようということになったのです。しかし除幕式は中止になりました。反対運動で言われていたのは「天皇に忠誠した者を韓国の地に受け止めるわけには行かない」「国家謝罪なき慰霊碑だ」という言葉でした。

2．事件の意味するもの

こういったことから、二つのことが言えると思います。ほとんどの韓国人は日本に対して被害者としての自己意識を持っています。そこに日本人の被害という事実を突きつけられた。それは加害被害関係を転倒させることとして反発したのです。根本的な問題は、韓国人たちが一般に引揚げのときの日本人の受難についてまったく知らなかったことにあります。韓国では敗戦（独立）前後の日本については、学校でもほとんど習いません。しかし、この物語に書かれているようなことは事実としてありました。わりと知られているのはソ連兵による被害ですが、いずれにしろ引揚げの際女性たちがつらい体験

をしたことは、いくつかの証言によって知られています。はげしい批判の背景には、まずはそういった知識の欠如があったことがまずあげられます。そのことを知っていたならば、事態はもう少し違ったことでしょう。

『ヨウコ物語』は反戦物語としての価値を持っています。しかし、被害者たちがなぜそこにいることになったのかという歴史の文脈については十分に書かれていません。もちろんそれは単にひとつの文学作品としての限界に過ぎず、そのことがこの自伝小説を廃棄していい要因になるとは思いません。ただ、日韓の歴史をあまり知らないアメリカでのこの物語の受容をめぐって（日本の被害を知らない）韓国系アメリカ人たちが神経質になるのは、アメリカで生きていくマイノリティとしてはありうる反応だったと思います。歴史小説というのは、それが個人史だとしても、背景や文脈をしっかりと書くものですが、この物語はその部分が弱かった。たとえば、宗主国の国民としての植民地体験を重層的に書けたならば、物語はより豊かになり、誤解も避けえたはずです。

『ヨウコ物語』をめぐる事態は、どちらも自民族中心に歴史を見たことから引き起こされたといえます。韓国人のたちは自分たちの被害だけを強調して特権化する傾向がありますが、加害国の被害も知る教育とそのことに心を痛めることのできる感性と考え方が必要でした。著者もまた、とかく‘戦争’との関連でのみ記憶されがちな戦後日本の、過去の歴史への向き合い方を踏襲していましたが、近代日本の戦争が何よりも植民地獲得のための戦争だったことにもう少し自覚的であるべきでした。

慰霊碑に対する批判の中心は、天皇に忠誠を誓ったひとたちを受け止められないことと、日本は国家謝罪をしていない、というものでした。国家謝罪がなかったとの認識は複雑な経緯はありましたが、結果としてこれまでの日本の謝罪が現在の韓国で謝罪として受けとめられていないことを示します。そこで国家の謝罪がないところに個人の謝罪は受け付けられない、ということになったのです。ならば、やはりここで機能なかった謝罪について日韓がともに向き合いなおす必要があるのではないのでしょうか。

また、「天皇に忠誠を誓った」との言葉は韓国における親日派の問題がまだ解決されてないこととかかわっています。日韓問題をめぐる葛藤や対立は、韓国内部の分裂や対立とも深く関係しているのです。

3. 日韓対立の重層的構造 植民地主義・冷戦の遺産として

慰霊碑問題では、韓国における反応を予想できなかったことも事態の原因だといえます。日韓の間に文化交流が始まり、相互理解も深まっていますが、それぞれの内部問題に対するより深い理解がない限り、このような衝突は避けられないでしょう。もちろん慰霊碑をめぐって韓国側の協力者がいたり地方自治体の好意的な協力を得られたことは、日本に対する韓国の理解が深まったことを意味しますが、かえってそのことが正確な判断を邪魔したと言えます。韓国内における進歩・保守の対立のような政治的対立が日韓の対話を難しくすることはよくあることですが、そのことはあまり見られてないようです。つまり、保守も進歩も、政府も国民も日本に対して同じ態度になって結果的には単なるナショナリズムになることは多いのですが、誰が先に、あるいは中心になってそのような反発を引き起こすのか、といった構造を見る必要があるのです。

なぜ朝鮮の青年たちは特攻隊になっていったのでしょうか。それは日本の一部の人々が言うように日本の戦争が正しかったからではありません。

当時韓国では、志願兵制度に応じて戦いに出た人もたくさんいました。最初は‘日本の戦争’と考えられて無関係なものと考えられていましたが、総督府やオピニオンリーダーによる様々な懐柔の言葉がそうさせていったのです。具体的には、正義の戦争だとか、軍人になるのは男性として名誉なことだ

といった言葉でした。日本に侵略されたのは 朝鮮時代が文の政治で武官たちが弱かったからで、朝鮮はもう一度武の力を取り戻すべき である、軍人になるのは男らしさを取り戻すことである、と考えたのです。軍人になることは教育を受けられない貧しい家のひとにとっては国家に認められる、ある種の出世の道でもありました。また、彼らは、日本ではなく朝鮮のために出征するのだと自分たちに言い聞かせてもいました。経験を積んで 将来の独立に備えると考えたものもいれば、 戦局で朝鮮も何らかの役割を果たすことで戦勝がもたらすべき地位向上を期待した側面もありました。

私はこのような考えのいずれも批判的に見ていますが、このような全ての理由の背後に、日本人と同等の扱いを受けたいという考えが強かったことは強調しておきたいと思います。つまり、彼らがそのような欲望を持ったのは何よりも「内鮮一体」とことあげられながら、その実消えない差別がそこに存在していたからなのです。いわば他者を支配する植民地主義そのものがそのような構造を作っていたのです。

日本に対する韓国の反発に、韓国国内における‘親日派’の問題がかかわっているという点は、現在の対立構造が植民地主義が残したもうひとつの遺産でもあることを示します。植民地主義をめぐる戦前の左右の対立がそのまま日本に対する姿勢として続いたことは、現在の日韓の対立構造が戦後の冷戦体制ともかかわっていることを示します。『ヨウコ物語』や慰霊碑は少々問題はあっても日本に対する理解のきっかけになる可能性を持っているものだったのですが、このような構造がそれを妨害した側面があるのです。

過去の歴史上の被害者はほんとうは誰だったのか。同じ韓国人でも被害者になった人もいれば加害者になった人もいる。それは日本人でも同じです。また、同人物が加害の側面と被害の側面をもつこともあります。しかし、このような認識が十分でないために、まだ他者の被害に心を開くことは十分できていないように思います。あるいは聞くことをそれぞれの中の一部が相手に対する不十分な知識、あるいはなんらかの自己利益のためにかたくなに拒否することもある。誰がどのような文脈で拒否しているのか。相手国の反発や非難を総体的なナショナリズムとして非難するのではなく、そのような構造を見ると新たな対話のきっかけが見出せるはずですが。

4. 今、何が必要か

露骨な植民地主義も冷戦もいちおう終わったということになっていますが、我々はまだ植民地主義や冷戦が作った構造の中にいます。今の日韓対立にはそれらが育ててきたものもあることが日韓の問題を考えると、念頭におかれるべきです。単なるナショナリズムの結果ではないのです。そういう意味では、いまあらためて冷戦主義的構造を終わらせ、植民地主義的構造を終わらせる、という意志が必要です。単にナショナリズムを問題化するだけでは、日韓問題の解決は難しくなるばかりです。

二年後には植民地支配が終わって 65 年、国交回復から 45 年を迎えます。しかし、その間慰安婦問題などの歴史問題が本格的に議論されるなど、過去のことについて多くの人々が考えようとしたのは 90 年代以降のここ 20 年です。その間、相互理解と対話の進展が進むと同時にさまざまな試行錯誤もありました。いまだ日韓問題が解決されていないのは、まだ日韓の間にほんとうの対話の土台が出来ていないことに原因があります。国家間の和解のためには日韓の国民の多くが合意しうる考え方が必要ですが、これまでは複雑な被害の構造が見られていなかったために、自民族中心に考えたり、相手国中心にのみ考えて、自己か他者を抑圧した側面もありました。民族的思考の枠組みを超えて一人の市民として考えると、日韓はより深くお互いを理解できるようになるはずですが。

しかし、お互いをよく知る人々でも、日韓の間には解決はない、先送りにしよう、次の世代に回そう、と言う意見が多いです。それはあきらめや不信が言わせる言葉だと思えます。あえて言えば、敗

北主義や自己の政治生命や安全を先に考える安全主義でもあります。しかし古い葛藤を次の世代に引き渡さないという責任意識、歴史そのものへの責任意識もさることながら、解決しようとしてうまくいかなかったここ二十年間に対する責任意識が必要です。そしてかかわった当事者たちがそれぞれ自己検証を含めてもう一度考えなおすべき時期に来ているのではないのでしょうか。

日本の文化が入ってくるようになっていらい、韓国の人たちにも普通の日本人の素顔が見えるようになりました。しかし残念ながら、文化への好意は政治や歴史とは別の文脈で語られています。しかし文化と歴史（政治）は切って話せる関係のものではありません。むしろどのようにそれらが深く結びついているのかが見られるべきです。

日韓はよくも悪くも同じ社会システムを持っている国家同志であり、もう少しの努力だけで望ましい関係を作りえる可能性をもっています。日韓の和解をなし遂げられるならば、アジアにおける過去の植民地国家と宗主国との和解として、ヨーロッパとは違った過去の克服が可能になることでしょう。そして、20世紀に人々を抑圧した植民地主義と民族主義と冷戦から自由になって、本当に意味であたらしい21世紀にすることができるはずで、だからこそ日韓はあきらめずに、多くの誤解や葛藤を乗り越えて努力し続けてゆくべきだと思うのです。今日はありがとうございました。